



## 《チェルノブイリの赤い森 フクシマの群青の海》講演会を終えて

(希来基金代表 小林 友子)

準備を重ねてきた講演会が無事に終わりました。

チェルノブイリとフクシマを繋げることができたと感じた一週間でした。「原発事故で受けた傷の痛みが分かり合える」と感じた時でもありました。

そんな時間を、ウクライナの人たちと一緒に過ごせたことに感謝します。そして、訪れてくれた彼等と、この福島で楽しい時間を過ごせたことが嬉しかった。

私は、原発避難者として、いつも支援される立場にありました。そんな思いから、自分達で自ら動き出すことが大事だと、チェルノブイリを訪れるたびに思いました。

今、故郷に戻る事ができたのは、



チェルノブイリを知り、学ぶ事ができたから、放射能を知り、測り、学ぶ事が

できたからだ。その機会を与えてくれたチェルノブイリ救援・中部に感謝します。それから、支援してくれた中日新聞社会事業団にも。素晴らしい、心のこもった映像と記念誌を作ってくれた杉田氏と翻訳者の竹内氏にも感謝です。皆で作上げた講演会でした。ありがとう。



〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST プラザ鶴舞 本館 5 階 B

**NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部**

銀行名：三菱 UFJ 銀行 高畑支店(店番号 297)

口座番号：普通 1682863

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 池田 光司

郵便替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

**★「ウクライナの消防士 招聘講演会」開催！**

6月28日～7月2日、ドンチェバさんが消防士達を引率して、福島(南相馬)にやってきた。いつもながら、ウクライナの友人を迎えることは、嬉しいものである。昨年のボウクンさん(避難～移住を余儀なくされた母親)、今回の消防士達(事故処理作業員)、そして30年続くクリスマスカードキャンペーン(子ども達)と、境遇や世代の垣根を超えて、フクシマとチェルノブイリの交流が広がりを見せている。30年前にカードを受け取った子ども達も、今は次世代の子ども達の両親となった。原発事故の被災国同士、日ウの交流はこれからも末永く続いていくだろう。

**★「ナタネ収穫 応援隊」来たる！**

6月29日～7月13日にかけて、愛知・岐阜から南相馬へ、4名の方(吉田さん・野澤さん・長谷川さん・松井さん)が、「ナタネ収穫 応援隊！」として駆けつけてくださった。

ナタネの収穫作業は、梅雨の時期と重なるため、天候を気にしながらの受入体制を強いられ、必ずしも効率の良い農作業支援とはならなかったかもしれない。しかし、地元のメンバーの士気が大いに高まったことは間違いない。そして、自宅に戻ってから、産直市場で「油菜ちゃん」の販売を行ってくださったり、「秋の測定隊」への参加を約束してくださったり

...と、今後につながる企画となったことも確かである。「応援隊」の皆様感謝！

**★「ナタネ&バイオマス」の放射能測定！**

ゴールデンウィークに「満開」を迎えた菜の

花畑は、6月下旬～7月上旬にコンバインで「収穫」、7月末までに「乾燥・選別・調整・袋詰」が終了し、いよいよ信田沢搾油所での「搾油」を待つばかりとなってきた。この間に、例年通り、「収穫されたナタネ」や「分別されたバイオマス」の放射能測定が実施された。

＊「バイオマス(ナタネの鞘や雑草の種など)」の放射能測定結果

・大甕圃場(26Bq/kg)・中太田圃場(5Bq/kg)・菅浜圃場(11Bq/kg)

＊「ナタネ(選別・調整後の単体)」の放射能測定結果

・中太田圃場(8Bq/kg)・町田圃場(4Bq/kg)

→「ナタネ単体」「バイオマス」とも、測定値は検出限界値(3～4Bq/kg)に近づき、かなり低くなってきているが、まだまだ「ND(検出限界値以下)」というわけにはいかない。

**★「楽天オンラインストア」への出店準備中！**

今年度は、ナタネの収率も大幅に向上し、目標収量(25トン)を上回る見込みとなっているが、反面、「油菜ちゃん」の販売は、地場の直販店(「道の駅 南相馬」・「セデッテ かしま」...etc.)や、県外の販売拠点の拡大などが伸び悩み、苦戦を強いられている。このため、ネット販売による全国展開をするべきかどうか...と悩んでいたところに、「楽天オンラインストア」が、福島県の助成により「出店契約料金ゼロ」「月々の基本料金ゼロ(1年間の限定付き)」で開設できる...という情報を得た。

厳しい出店審査に見事合格し、現在は店舗開設に必要な膨大な作業に取り組んでいるところである。何とかお盆明けには店舗がオープンできるところまで来た。乞うご期待！

## 通常総会&チェル救デーを開催して

(市原 佳代)

6月8日、名古屋市東生涯学習センターにおいて、通常総会を開催しました。

総会では、昨年度の事業報告、決算報告、理事・監事の選任、すべての議案が承認されました。しかし質疑応答では、財政再建への抜本策の必要性を求める意見も出ました。正会員の方達も同じように存続を案じている、ということを確認しました。

そのほかに、今年度は6年ぶりの理事長交代と、新たな理事として上田さんを迎え、体制のリニューアルを図りました。支援者の方々の原発被災地への想いを、この新たなメンバーで受け止め、真摯に耳を傾けながら努力を重ねていくつもりです。



続いてチェル救デーでは、原さんのバイオガスの取り組みを取材した「伊那ケーブルTVの番組」を上映し、そのあと、南相馬の菜の花プロジェクトの報告や「油菜のさと」構想について、神野さんが熱く語ってくれました。

財政難の解消は茨の道ですが、メンバーの意気込みは衰えていません。今後とも、変わらぬご支援をよろしくお願いいたします！

## 新理事長就任にあたり

(池田 光司)

新たに理事長を務めることになりました、池田光司（いけだ みつじ）です。2007年から、毎月開かれる運営委員会に出席するようになり、2009年から理事を務めて、先月総会後に開かれた理事会で、理事の互選により理事長となりました。みなさま、よろしくお願いします。



今、チェル救はとても厳しい状況にあります。財政危機と高齢化です。すでに、みなさまには多大なご支援をいただいておりますが、活動資金が底をつきそうな状態から抜け出せずにいます。現在、手持ちにある資金で活動できるのは数カ月という状況で、まさに自転車操業です。チェルノブイリから33年、福島から8年が経ち、支援の必要性を理解してもらうことが難しく、徐々に寄付が集まりにくくなっています。また、運営委員や理事の中には、チェル救の立上げ当時から活躍されている方も多くみえます。チェル救の活動を支え続けてこられた方々で、今後も支え続けて欲しい方々です。ただ、平均年齢が60代後半になってきました。今後10年以上の支援を考えた場合は、若い世代の力が欠かせません。

原発事故による放射能の影響は、減ることはあっても消えることはありません。チェルノブイリ原発の30km圏内は、30年以上経った今でも立入り禁止です。周辺地域の人々にとって、放射能の健康への影響は今も続いています。また福島では、空間線量率が下がってきた地域もありますが、土壌中にはまだ多くの放射能が残っています。「油菜のさと」構想へとつながる菜の花プロジェクトは希望のプロジェクトですが、放射能に対する細心の注意が必要です。放射能測定がプロジェクトを支えています。

チェル救は、原発事故の放射能で被害を受けた方々に寄り添って、とても大切な活動を続けてきていると思います。はなはだ力不足の理事長ですが、この活動が続けられるよう尽力していく所存です。引き続きのご支援をよろしくお願いします。

## 『ボーナスカンパのお礼』と『チェル救の現状とお願い』

### ボーナスカンパのお礼

前号のポレーシェ 171 号で、ボーナスカンパのお願いをしましたところ、100 名を超えるみなさまから寄付をお寄せいただきました。6～7月(7/22 現在)の期間で、総額が120 万円を超える寄付がありました。本当にありがとうございます。

おかげさまで、ウクライナの「ホステージ基金」(カウンターパート)に今年度予定しています「業務委託費」と「支援金」の目途がつかしました。みなさまからのご支援に感謝いたします。6～7月(7/22 現在)の期間にお寄せいただきました寄付金の内訳は下記です。



ミル ク 支 援 :	3 万 円
チェルノブイリ 支 援 :	1 万 円
福 島 支 援 :	5 万 円
一般寄付 (指定なし) :	112 万 円

合計 121 万円

チェルノブイリ救援・中部は、みなさまのおかげで活動を続けていくことができています。お寄せいただきました寄付金は、支援活動のために大切に使用させていただきます。

チェルノブイリ救援・中部  
理事・運営委員一同

### チェル救の現状とお願い

チェルノブイリ救援・中部は、1990 年 4 月に発足しまして、今年度で 30 年目になります。みなさま(個人さま、企業さま、様々な団体さま…チェル救団体設立当初には国からも…)に支えていただき、30 年にわたって様々な支援活動を続けていくことができました。本当にありがとうございます。

2011 年からは、福島への支援活動も始まり、チェル救として活動したいことが増えていきました。一方で、企業さまなどの支援先の変更等がありまして、ここ数年でチェル救の運営資金がだんだんと苦しくなってきました。

昨年度は、年度途中で運営資金が底をつくかもしれない状態となり、「予定していました事業を一部中止すること」と「皆様からお寄せいただいた緊急寄付」などにより、なんとか無事に昨年度は終えることができました。

このような状態の中、日本を含め、世界的にいろいろな社会問題があるため、今年度のチェル救への寄付は、残念ながら減る方向になっています。そのため、第 1 四半期(4～7 月)で非常に厳しい運営資金の状態となり、現段階におきまして(7 月の運営委員会にて)、ウクライナへの「派遣事業の中止」を決めました。また、ウクライナの支援活動団体「ホステージ基金」への支援金額についても再検討をしています。

チェル救の活動を続けていくにあたり、みなさまからの寄付の使途をこれからも丁寧に吟味させていただきます。支援先・支援額、又運営維持のための管理費について決めていきたいと思っております。

原子力災害の影響は長い間続きます。福島支援の主たる活動「放射線量測定プロジェクト」では、土壌の放射線量測定を昨年度から始めたばかりです。現状を記録する活動はとても重要です。できることならばこれからも、ウクライナと福島への支援活動を続けていきたいと願っています。昨年度の 12 月に続くお願いでもとても恐縮なのですが、チェル救の窮地を助けていただけますととても有り難く、どうぞよろしく願いいたします。

チェルノブイリ救援・中部  
理事・運営委員一同

1990年8月21日、チェルノブイリ救援・中部のメンバー、渡辺春夫さんと坂東弘美さんがウクライナに向けて旅立った。救援物資をもってチェルノブイリの被災地を訪問した日本では最初のNPOだった。あれから30年、長いようで短かったこの年月に、私たちが目指したものは何だったのか。

## チェルノブイリ原発事故と私たち

チェルノブイリ原発4号炉が爆発炎上したのは、1986年4月26日の深夜だった。3日後に名古屋駅前のデパートの電光掲示板で初めて知った、当時の緊張は今でも忘れない。後に誤報と分かったが、「ソ連の原発爆発で二千人以上が即死した」…とあった。

放射能は名古屋大学屋上の大気中でも観測され、通常の数倍にはね上がった（名古屋大学の古川路明さん観測）。当時の日本国内では、原発建設の真っ最中。「事故が起こったらどうする？」「放射性廃棄物はどうする？」という反対派の主張に、専門家や電力会社・政府は「5重の壁で放射能は外に出ない」「廃棄物はそのうち何とかなる」と主張した。だが、今もって未解決だ。

何かしようにも情報不足だった。3年後にようやく被災地の情報が入ってきた。ソ連最後のゴルバチョフ大統領が、情報開示を始めたからだった。とにかく何かしなければ、とクチコミで友人知人が集まったのは1990年4月16日、参加者は80名だった。東海3県はもとより、長野県や富山県からの参加者もいた。団体名は「チェルノブイリ救援・中部」（以下、「チェル救」）に決まった。

その後、ソ連各地に手紙を出し、2か月後に最初の返事が来たのが、ウクライナ共和国ジトーミル州の地方紙「ジトーミルスキー・ヴィスニーク」の編集長からだった。とにかく現地を視てほしい、医薬品や医療機器が足りない、という内容だった。

外務省と交渉し、渡辺さんと坂東さんが粉ミルクや使い捨て注射器など500Kgの救援物資を持って、ウクライナ国ジトーミル州を訪問したのが8月だった。それから30年、ジトーミルの人々と私達の交流は今も続いている。活動直後にウクライナのお母さん達から届いた手紙

は、「107通の手紙」として出版された。マスコミ報道では知らない、事故処理に関わった家族の病気や子どもの状況等が、生々しく書かれていた。訪問した二人に、赤ちゃんを抱いた母親が母乳の汚染を訴えた、という報告は衝撃だった。そうした生の情報が、今も続く数々の支援活動につながった。

## 深刻な被害、でも逞しく生きる

現地における私たちの活動に大きな支えとなったのは、ビスニーク紙の廃刊後に出来たNPO「チェルノブイリ・ホステージ（人質）基金」（以下、「ホ基金」）と「チェルノブイリの消防士達基金」だった。この間、何人もの友人・知人を失った。「ホ基金」の代表だったU. キリチャンスキー氏は永年、私の喧嘩友達だったが、9年前に亡くなった。しかし、大学卒業後に「ホ基金」に就職したE. ドンチェバさんは、今や大活躍である。彼女には最近孫ができたという。事故当時、原発職員だったボウクンさんは文通で、事故から3日後の強制避難当時8歳だった、アヌーシカちゃんの写真を送ってくれた。そのかわいい写真は「チェル救」のパンフレットの表紙になった。一昨年、あの子がお母さんになったよ、とボウクンさんから孫を抱いたアヌーシカさんの写真をもらった。様々な病気と闘いながら母親になった彼女の喜びは、如何程か計り知れない。

最近出版した福島とウクライナのお母さん達の手紙集には、困難に会いながら如何に懸命に生きてきたかが記されている。原発事故で「生きるとは何か」が問われたのだ。

2007年からウクライナで始めた「菜の花プロジェクト」は今、福島で「油菜のさと」として花開こうとしている。チェルノブイリと福島の犠牲を経て、やっと原発は終わりの時代に入ったのだ。

（2019年7月25日 河田）

# 特集!! ウクライナの消防士たちとの交流 講演会

## <Face to Face(フェイス to フェイス)>

ホステージ基金代表

イェヴゲーニヤ・ドンチェヴァ

シヨパン空港の窓外の飛行機は、世界のあちこちに飛んで行こうとしている白い鳥の群れのように見えました。その中に、私たちのフルシャワー東京便の飛行機もありました。こうして、ウクライナ派遣団の訪日の旅は始まったのです。今回は、2名の消防士、医師、そしてウクライナのNPOの代表者である私がメンバーでした。



「平和な原子力」が引き起こし得る惨事の直接の目撃者たちが招聘されるのは、初めてのことはありません。

2018年2月、私は元プリピャチ市民のカテリーナ・ボウクンと共に日本を訪れました。彼女はチェルノブイリ原発で夫とともに働いており、1986年4月、子どもの健康を守るため避難を余儀なくされたのです。彼女の講演は、小高区の住民たちの関心を集めました。一方、私たちウクライナ側は、自分たちの証言が、日本の方々が希望を持って将来に目を向ける助けになるということを、改めて確信したのです。

この6月の訪問で、私の気づいた最も興味深いことの一つは、**日本の方々と私たちの交流が、一方的な語りではなく対話となり、さらに議論にまでなってきた**ということでした。私たちは自分たちの生活上の出来事について語り、助言をしたばかりでなく、こちらから質問もしました。一方、子ども達の将来と我が家のことを、心から心配している地元の方々は、私たちに答え、討論しようとしていました。これは、日本社会が(小さな小高区でも)自らの権利を守って闘おうとしていることの、明らかな徴候ではないでしょうか。

人々は、切実な質問をしてきました。彼らが関心を持っていたのは、私たちの生活の細部であり、チェルノブイリ原発事故後の生存率でした。ただ語り合うためにやってきて、私たちの手を握り、

自分たちの知識を分かち合いたいという私たちの希望に、感謝してくれた人たちもありました。私にとってとりわけ嬉しかったのは、知り合いの方々に会えたことでした。彼らの手を、今度はウクライナで握ることができることを、心から期待したいと思います。多くの方たちが、私たちの話したことすべてを、自分の目で見たいとおっしゃってくれたのですから。

毎晩、その日の締めくくりを行い、私たちは日中見てきたことすべてについて話し合いました。そして言うておかなければならないのは、ほぼすべての派遣団メンバーの主な印象の一つとして、旧跡や伝統を残す古来の日本と、電子工学の分野での新しい技術や業績との組み合わせが挙げられたということです。そのことに、一般の日本人たちは、すでに注意を払っていないようですが…。

そして自然に対する配慮です。どのようにして21世紀に至るまで、巨大で密生した森、時には通り抜けることもできないような森を、守ってこられたのでしょうか？ 残念なことに、私たちはカルパチア山脈の森をほとんど失ってしまいました。お金のために、膨大な面積の森林が伐採されてしまったからです。

最後に、私はこの訪問を準備していただいたことに、お礼を申し上げたいと思います。ウクライナ側にとって興味深い訪問先が用意され、私たちの希望がすべて細かな点まで考慮され、若い消防士たちの目を開かせた、観光のプログラムまで考えていただきました。今、彼らは日の出づる国の国民の基本的な信念を理解しています。**人が幸せになる手助けをすれば、自分も幸せになるのだと。**

もう一つ付け加えたいのは、**ご自分の国と国民を守ってください**ということです。皆さんは辛抱強い仕事と不屈の精神力とで、賞賛に値する方々です。日本の業績は、すでに多くの民族の模範です。ただ、困難だけは、力を合わせて乗り越えていこうではありませんか。原発事故は、私たちの国の歴史の中で、悲しいひとコマとなっているのですから。でも、私たちはすべてを克服できます。そして、私はそのことを信じています。**私の日本の友人たちは、決してあきらめない**からです。

## <見えない敵「平和な原子力」との闘い> オヴルチ市消防・救助署の署長

ユーリイ・クシネルチュク



2019年6月  
末、ジトーミル  
州の私たちの少  
人数の派遣団  
は、「Face to  
Face」という  
プロジェクトの  
一環として、日

本を訪れました。そこで私たちは、丸5日間を過ごしたのです。まず何よりも先に、このプロジェクトの実現に尽力してくださった方々、「チェルノブイリ救援・中部」の皆さん、そして、東京でのすばらしい見学のお世話をしてくださった慈善団体「CheFuKo(チェルノブイリ・福島・子ども)基金」の皆さんに、感謝させていただきたいと思います。私たちは、多くの温かい対応と、最大級のプラスのエネルギーをいただきました。どうもありがとうございます！ほんのちょっとしたことも、私たちの記憶に残っています。通訳のアーニャ(村山敦子さん)とオレーナにも、心よりお礼を申し上げます。彼女たちはずっと私たちに付き添い、いつも、話されたことを伝えるだけでなく、私たちの理解を助けてくれました。日本の文化は、ウクライナのとは全く異なっているのですから。初日から、私たちは日本のすばらしい美しさを目にすることができました。緑も多く、きれいで私たちには珍しい水田や竹藪、興味深い建築、そして人々の生活様式も違ってきます。この国で私たちは、信じられないほどすばらしい雰囲気滞在を、味わうことができました。

もちろん、消防士として私が非常に興味を持ったのは、日本の消防のシステムです。私たちは南相馬市と小高区の消防署を訪れ、その建物をいくつか拝見しました。最も興味深かったのは、消防車と諸設備が収納されている車庫です。そして消防士たちは、上司たちとともに、私たちに消防車とその装備を見せてくれ、その使い方や主な特徴について話してくれました。消防は世界のどの国でもほとんど同じ機能を果たし、同様の設備を用いていることがわかりました。というのは、私た

ちが見たすべての機器は、外見や構造がやや違うくらいで、ウクライナのものと同じ機能を果たしていたからです。日本のものの方が、より自動化されていますが。私は見せていただいたものに感嘆し、私たちは敬意と友好の証として、日本の消防士たちとプレゼントを交換しました。

また、「チェルノブイリ救援・中部」の方々、特に小林夫妻のおかげで、私たちは福島県の広い範囲を車で回り、そこで**日本の方々が見えない敵である「平和な原子力」と闘っている**ようすを見ることができました。それが1986年のウクライナと同じように、2011年の日本で、恐ろしい災厄を人々とその住んでいた土地にもたらしたのです。

私は、汚染地域でかなりの短期間に行われた作業を見て、驚嘆しました。放射性物質によって汚染された表土を除去し、それを一時的に一定の場所に集め、特殊な袋に詰めて保管するという戦略が採られたため、土地の除染が非常にすみやかに行われているのです。このようにして放射性の塵が、また放射線そのものが除去され、土地は使用可能になり、住民がその後普通に暮らすことができます。さらに、いたるところで、子ども達の遊び場のそばにまで、太陽光電池で動く装置が取り付けられ、リアルタイムで常時放射線量を示しており、すべての一般市民がそれを見て、そこにいられるかどうかを判断することができます。私たちが、いろいろな場所に設置されたそれらの装置で見た数値は、最小限の放射線量を示していました。また、被災した町では測定所が設けられており、そこで住民は誰でも、自分の畑で採れた食品を持ち込んで放射能を調べることができます。しかも、それは全く無料で行われています。私たちはさらに、ウクライナと日本の国民が遭遇した二つの悲劇、チェルノブイリと福島の原子力発電所の事故についての講演会に出席しました。私たち派遣団のメンバーは皆スピーチをし、参加者の方々やジャーナリストたちと、彼らが興味を持っているさまざまな問題について話し合いました。

また、瑞巖寺と松島の遊覧船でのすばらしい見学についても、触れておきたいと思います。

こうして、私たちの福島県訪問はあっという間に過ぎ、私たちは東京に向けて出発しました。ここでは、慈善団体「CheFuKo 基金」の友人たちが

待っていてくれました。彼らは、私たちが喜んで迎え、事務所を見せてくれ、そこで話し合いをした後、私たちはすばらしい東京の街の美しさに感嘆しました。私は、さまざまな建築の取り合わせが、街に活気を与えているように驚きました。

このように、今回の旅は本当にすばらしいもので、私の一生の思い出になると思います。私はいつでも、これらのすばらしい印象を、微笑みながら思い出すことでしょう。そして私は、新しい友人たちを得られたことにとても喜んでます。

## <人の命は、もっとも貴い宝>

### ジトーミル州非常事態局医療センター所長

#### 医師 ハルィナ・プラホタ

こんにちは、親愛なる日本の友人の皆さん！

この公開書簡で、私は派遣団メンバーとしての訪日の印象を、お伝えしたいと思います。

2019年6月28日、「チェルノブイリ救援・中部」のご招聘により、派遣団の一員として、私は福島県南相馬市小高区を訪れ、その後の数日、福島第1原発事故によって被災した地域を見学し、「チェルノブイリ原発事故の影響のいくつかの側面」という講演を行い、数々のご質問にお答えしました。

まず、「チェルノブイリ救援・中部」運営委員会に、私たちの訪問の綿密なオーガナイズに、感謝申し上げます。国籍も信仰も文化も違う私たちですが、国を愛する気持ち、人への愛情、今日と将来への責任感が、私たちを一つにしています。

日本は、本当に私の心に入ってきましたので、私はウクライナに戻ってからも、皆さんのことを考え続けています。最近、オウルチ市とオレウシク市（チェルノブイリ原発事故で被災した地区の中心地です）を、消防士たちの健康診断のため訪れた際、私は思わず知らず改めて比較しました。私たちが、チェルノブイリ原発事故後の33年間に行ったことと、日本の方々が、福島第1原発事故後の8年間に行ったこと……。暮らしの戻ってきた地域、汚染地域の放射線管理の組織（土壌・水・栽培された作物・牛乳など）に、私は本当に驚かされました。皆さんの前に、深くお辞儀をさせていただきます。非常に献身的で勤勉な民

族である皆さんのことを、誇りに思います。

私から皆さんへの助言は、以下の通りです。

1. 皆さんの心に根づいた恐れ、目に見えない放射線という敵への恐れ、故郷の土地で暮らすことへの恐れと闘うことです。私が1994年、初めてナロジチ町を訪ねた時のことを、お話ししたいと思います。無人の家々、雑草の生い茂った庭、黒ずんだ若木を見て、私も恐ろしくなりました。土地はあるのに、人はいないのです。数十年が経ち、今、ナロジチ町の家にはすべて人が住み、子どもの笑い声が響いています。「彼らは20~30年後に戻ってきたんでしょう」と言われるでしょうが、私は「そんなに長く待つ必要があるでしょうか？」と問いたいと思います。答えは明らかです。除染された土地、汚染されていない食品と水が、そこに住むための主要な基準です。
2. 集められた放射性の土壌の保管場所に、注意することです。それは潜在的に危険な物体です（ストロンチウム90の半減期は29年、セシウム137の半減期は30.17年、プルトニウム239の半減期は24,110年です）。放射能が許容値を超える土壌は、保安の条件に従って隔離しなければなりません。私は、避難が行われた地域で、多くの場所に太陽電池が設置されていることに気づきました。汚染土のミニ石棺を、太陽電池の下に配置することもできるのではないのでしょうか。
3. 国に要求して、長期にわたる毎年の無料健康診断と、時宜にかなった保養プログラムを、福島第1原発事故の被災者に保障させることです。人の命は、最も貴い宝なのですから。

敬意と愛と未来への信頼を込めて



## 「菜種収穫 応援隊」に参加して

2年前の春、初めて参加した南相馬市の放射線量測定ボランティアは、被災地の状況を肌身に感じる貴重な体験になりました。その後、また参加したいとは思っていましたが、農業をやっている関係で、春、秋ともに農繁期でなかなか参加できずにいました。

そんな中、今回の菜種収穫ボランティアの募集情報をもらい、即参加を決めました。

幸いにも雨が降らず曇りだったため、あまり暑くなく、普段使っているものの2回以上も大きなコンバインの運転や、収穫された菜種の運搬、乾燥機への投入といった作業も、あまり問題なくこなすことができました。

今回は、収穫作業が終盤のため、仕事量はかなり少なめだったこともあり、少々時間をもてあまし気味でした。これも、ボランティアということで、こちらの都合で参加時期を決めたため（それもわずか1日のみ）、本当に人手が欲しい時と合わなかったことが要因でした。また、全くの素人ということで、依頼された作業内容も、非常に楽なものだったように思います。稲作作業、草刈り等、もっとやれそうなこともあったと思います。被災地の復興・農地再生という意味では、年々そ

の作付面積が増えていることを考えると、成功しつつあるのかなと思います。まだたくさんある耕作放棄地を、よみがえらせる有効な手段なので、もっと広げることに協力したいと思います。ただ、今回は、職員、ボランティアを含め、杉内さんを除く作業員5名中、地元の人が1名のみだったのは、少々さみしい感じがしました。現在の日本では、被災地に限らず、農業で生計を立てるのは非常に難しい状況です。補助金やボランティアにたよらず、地元の人たちが生計を立てられる事業にすることが、真の復興につながるのだと思います。そこにつなげることが、私のようなボランティアの仕事だと思っています。

最後にひとつ、杉内さんたち受け入れ側の都合・要望をもっと反映させることのできる、ボランティアの取り組み方を考える必要があるように思いました。たとえば、ボランティアの参加期間に事前に現場との調整で決めるとか、やれる作業が分かっているボランティアの人（一度参加した人とか農業者）に依頼するシステムを作るとかを考えられないでしょうか。次の機会があれば、もっと長期間の参加をしたいと思っています。

(2019.07.21 野澤 優)

- ④ 農作物から目が離せない！ ナタネの結実は、蒔いた時期・土壌・天候により、時間差が生じるし、細長い鞘の先と茎もとでも変わって



くるので、刈り入れ時期が難しい…と、毎朝出勤前に栽培農地を見回っておられた。

### 5 最後に

78歳になる私が出かけて行っても良いのか迷いましたが、アグリあぶくま株式会社の皆様にサポートしていただいたおかげで、楽しく活動できました。お世話になった全ての皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。「菜の花畑に入日薄れ…」と歌った唱歌「朧月夜」の世界が、一日でも早く戻ってきますように。また機会を見つけて出掛けます。(2019.07.23 松井 弘)

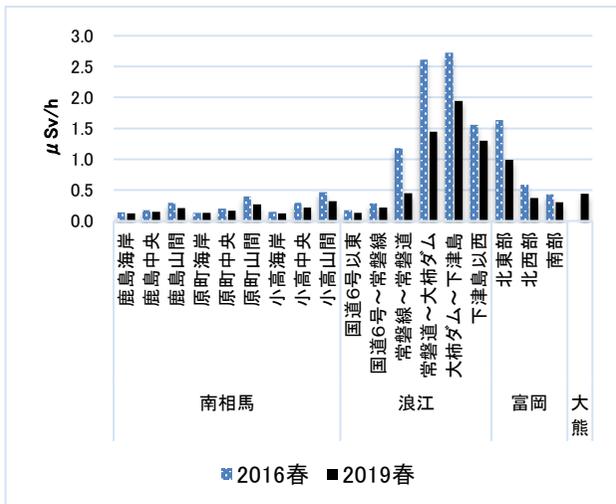
## ボランティア作業を、経験して

1. 「収穫ボランティア作業」のきっかけ  
311 東北支援活動を一緒にしている、沖さんからの情報
2. 活動日…7月11と12日の2日間
3. 活動内容…アグリあぶくま株式会社で、乾燥したナタネの種の選別、25kgの袋詰め
4. 思ったこと 感じたこと
  - ① 営農に必要な大型農機具の数の多さにびっくり！こんなに揃えなければ、農業はできないのか？
  - ② 一緒に作業した人たちの修理や調整技術・技能の高さ。その場に応じて自分たちで対処し、作業が滞ることはなかった。
  - ③ 選別機は、新品で自動化されていたが、「篩(フルイ)」の微調整作業を続けて、製品(ナタネ種)の品質向上を目指してみえた。

## 第17期（第34次・35次）空間線量率測定結果（池田 光司）

今春4月に、17回目の空間線量率（空間の放射能の強さ）の測定が、4日間かけて（2回に分けて2日間ずつ）行われました。今回は、従来の南相馬市・浪江町・富岡町に加えて、初めて大熊町の測定も行い、「4自治体統合マップ」を作製しました。また、空間線量率がどのくらい変化したか分かるように、3年前（2016年春）のマップと今回のマップを並べて見られるようにしました。マップは、チェル救のホームページに公開されていますので、ぜひご覧ください。（チェルノブイリ救援・中部 [検索](#)）

以下、今回のマップをご覧になるときに参考になると思われるデータをご報告します。ぜひ、マップを見ながら読んでいただければと思います。



各地域の平均空間線量率[μSv/h]を、3年前（2016年春）と今回（2019年春）を並べてグラフにしてみました。まず、どの地域も3年前に比べると空間線量率が下がっている（薄い棒グラフの右横の濃い棒グラフが低くなっている）ことがわかります。各地域がどのくらい下がったかは、後で詳しく説明します。

次に、今回の各地域の空間線量率を見てみると（濃い棒グラフの高さを比べてみてください）、グラフ左から南相馬市全域と浪江町の海側常磐線までは、平均空間線量率が0.1～0.3μSv/h程度で比較的極めて低いことがわかります。マップを見ていただくと、この地域は空間線量率が低いことを示す青色のブロックが

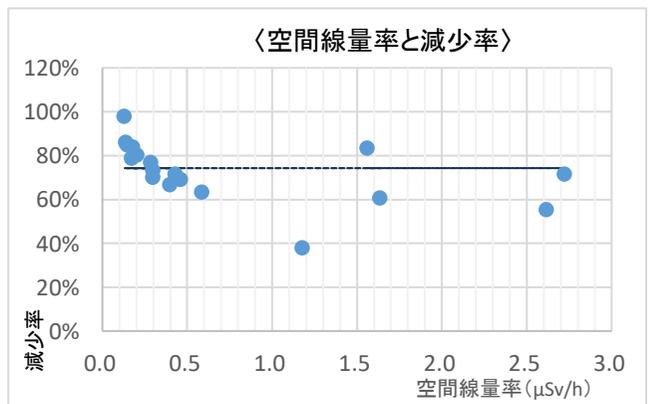
多くなっています。浪江町で常磐線を越えると、急激に平均空間線量率が高くなり、最も高い大柿ダム～下津島では現在でも2.0μSv/h近くあります。福島第一原発事故時に放射性物質を含んだ雨雲が通って雨が降り、強い汚染を被った地域です。

福島第一原発の南に位置する富岡町では、原発近くの海岸側北東部の平均空間線量率が高く、北西部、南部と順に低くなります。北側の地域と様相が異なります。今回はじめて測定した大熊町は、常磐道沿いと常磐道より西の国道288号線沿いを中心に41カ所測定しましたが、平均空間線量率は0.41μSv/hでした。放射能汚染は、原発への近さよりも雨雲の動きが大きく影響したことが、より鮮明になりました。

右のグラフは、3年前の各地域の平均空間線量率と、3年間の減少率（%の数字が小さいほど3年間で大きく減少したことを示す）との関係を示しました。物理的半減期から計算される減少率は74%で、グラフ上の横線で示してあります。空間線量率が1μSv/h以下の地域では、空間線量率が低いほど減少していないことがわかります。これは、測定値に占める自然放射線の割合が高くなることによると考えられます。

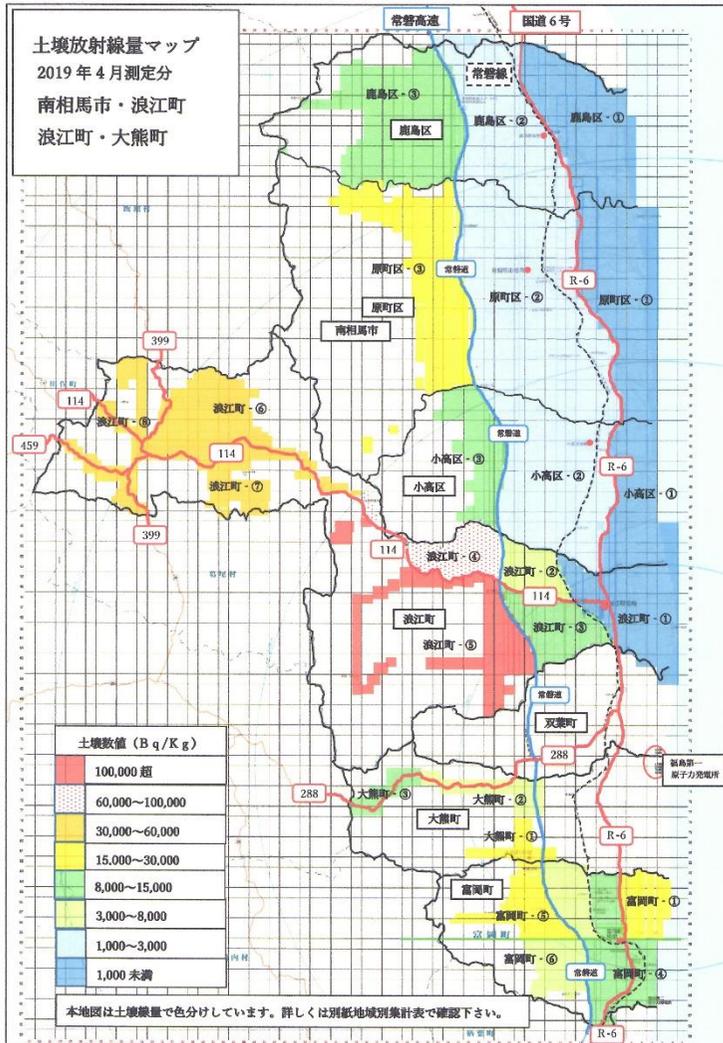
一方、1μSv/hより高い地域では、空間線量率との関係はなく、場所によって40～80%の幅でばらつくことがわかりました。地域によっては、雨などの環境効果があったと考えられます。今回の報告は以上です。

今回の測定もLUSHの助成を受けて可能となりました。ご支援に感謝します。



# 2019年4月に採取した土壤の放射線量マップ その考察

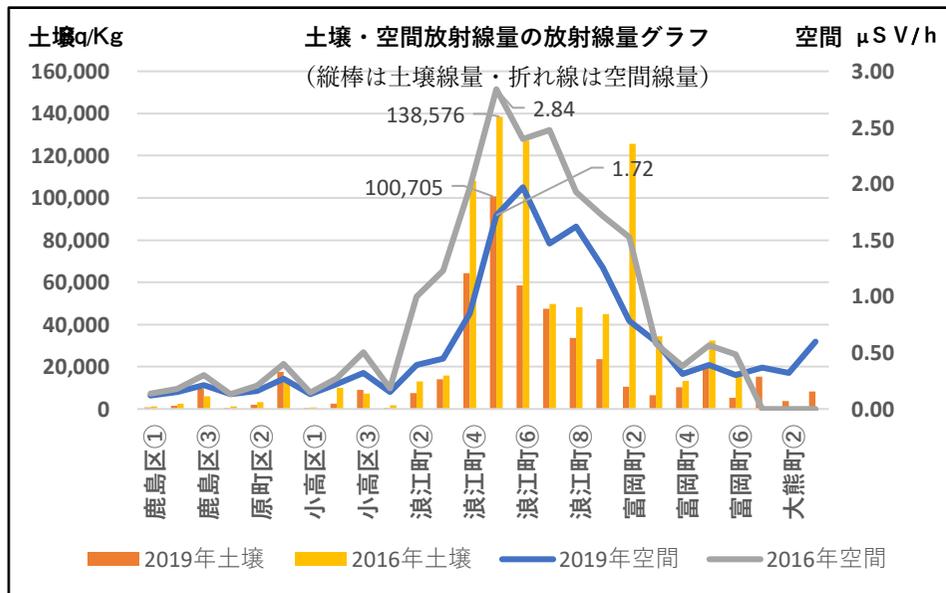
(放射能測定センター・南相馬「とどげ鳥」 小林 岳紀)



左のグラフは一市、三町をブロック分けして各々の土壤および空間放射線量測定値の平均値をグラフ化したものです。土壤・空間放射線量数値を2019年4月と三年前の2016年4月のデータを比較表示しています。棒グラフは土壤放射線量、折れ線グラフは空間線量をしめします。なお、各市町のブロック分けは国道や高速道路、鉄道路線などを基準として区分しましたが詳細は別紙の「空間・土壤線量地区別年推移別比較表」や「土壤放射線量マップ」でご確認下さい。

南相馬市は土壤・空間放射線量共に比較的低位の放射線量を示しております。浪江町では海岸部のエリアは低位の放射線量ですが常磐高速道以西から高い放射線量を示す状況となっています。富岡町では南相馬市と浪江町の間程度の放射線量となっています。

また、浪江町、富岡町の測定ポイントには未だに立入制限が継続されている「帰還困難区域」が含まれており、詳細については国や市町の広報資料などで確認して下さい。



なお、大熊町については2019年4月に福島第一原子力発電所の立地自治体として初めて立入規制が解除され、それに伴い今回から測定対象に含めました。帰還困難区域については通行のみが許可されている道路付近も対象としています。

## 事務局便り

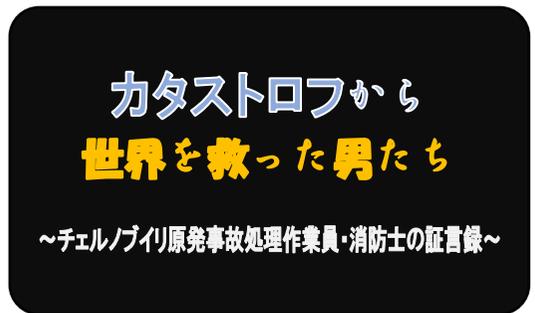
他愛のない話…いよいよ猛暑の夏。せっせと歩いて事務所に到着すると、汗びっしょり。すぐにでも「クーラー！」状態なのだが、そこはエコロジストを装い、扇風機を ON。が、壊れかけの扇風機は回らない。見えないテレビは叩くもの…と刷り込まれているので、動かない電化製品は、トントンと叩いてみる。応答なし。あ～むかつく～とっていると、突然の強風。うなりをあげて羽が回り始めた。ON してきっかり 3 分！次の日も 3 分。こいつはこいつなりに考えがあつてのことか。妙に律義。ポンコツ同士、エアコンも時には友として、この夏を乗り切ろう！チェル救ピンチの折、「窮（貧）すれば鈍する」に陥ることなく、「窮すれば通ず」となるようにと願いつつ。（山盛）

## お知らせ インタビュー動画を「YouTube」にアップしました！

6 月 30 日（日）に、南相馬市小高区「浮舟会館」で講演会が行われました。私たち救援・中部 30 年来のお友だち、ボリス・チュマクさん、トヴァンシクィイ・オレーフさん、アントニーク・レオニードさんの近影と、30 年前の事故処理作業時のインタビュー（約 10 分）を視聴することができます。

講演に来られた方には、DVD でご覧いただきました。昨年 9 月に、「スタジオ・サードアイ 小高映画舎」のすぎた和人さんが、ウクライナに出向いてインタビューし、編集しました。

「YouTube」のサイトで、「カタストロフから」で検索すると、見つけることができます。（美）



## 編集後記

☆『エスカレーターは歩かずに立ち止まる』。鉄道各社でキャンペーンが始まった。急いでいる人への気遣いから始まったルールだけど、片側を空けるために行列を作るのも妙な話です。（佳）

☆ネットニュースに「油菜ちゃんギフト（フルセット）¥3,700」の CM が出現することに気づいた。更に気になって他所のことまで目に付いちゃう…今日もまた夜更かしだよ。（美）

☆令和元年 7 月 21 日に参議院議員選挙の投開票が行われ、応援した山本太郎氏（れいわ新選組）が大健闘！ 比例区で「得票率 2%」を大幅に上回り（4.55%）、政党（獲得）要件を勝ち取った。日本初の「市民政党」誕生である！ 彼は、比例候補者の中で最高の 99 万票余りを獲得しながら、惜しくも落選となったが、これは決して作戦ミスではない。政党「れいわ新選組」の代表として、より活発に政策を提言することができるようになる。「国会を市民に開かれたバリアフリーに作り変える！」「人間の価値を“生産性”で決めない！（生きていることにこそ、価値がある！）」「既存の利権構造に忖度しない！（忖度すべきは、市民に対してである！）」「真実を追求し、徹底的に暴露する！」…そんな「市民政党」が誕生したのである。彼とその仲間達「れいわ新選組」は、我が国の「政治」や「メディア」を、根本から作り変える風穴を開けた。壁をぶち壊すのは、これから合流する「市民」の使命である。（J）

〒 456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷 「エーブリント」

TEL・FAX (052) 871-9473